
東方墓王伝

墓守ココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方墓王伝

【Nコード】

N5748Z

【作者名】

墓守ココア

【あらすじ】

王の住む地、ロード・ランにて不死の勇者に打ち倒された墓王ニトは、何者かにより幻想郷へと連れられていつてしまう。

話を聞くと幻想郷に不死が現れ始め、ゆっくりではあるが外の世界にも影響が現れ始めているようだが……

東方墓王伝 プロローグ（前書き）

このお話は本編の前の話です。幻想郷の住人はしばらく出てこられませんが、ご了承ください。それとこのようなサイトに小説を投稿するのは初めてのことなので色々とおかしな点が多々あると思いますが、よろしくお願いします。

東方墓王伝 プロローグ

暗く 冷たい闇の先で、彼は待っていた 不死の勇者の存在を

尋常の光を喰らう、死の領域、そこで彼はどれくらいの間待ち望んでいたのだろうか。

かつての彼の戦友、大王グウィンが消えかけの火を継ぎに行き王が全てを擲って燃やし続けた火が、もう少しまれようとしている。

”最初の死者”ニト

数千年前最初の火より、太陽の光の王グウィン、イザリスの魔女達、誰も知らぬ小人と共に

王のソウルを見出した者の一人である。

その外見は多くの人骨が集まったような姿で、

黒く、実体のないマントを羽織り、右腕には死者の骨で出来た巨大な剣を持っている

まさに、最初の死者と呼ぶに相応しい姿だろう。

後に、王のソウルを見出した彼らは、当時の世界の支配者である古竜達に、戦いを挑んだ。

グウィンの雷が、岩のウロコを貫き

魔女の炎は嵐となり

死の瘴気が墓王ニトによって解き放たれた

そして、ウロコのない白竜、シースの裏切りにより、遂に古竜は敗れた

こうして火の時代がはじまった

だが、世に永遠というものは無く、やがて火は消え、暗闇だけが残る

今や、火はまさに消えかけ

人の世には届かず、夜ばかりが続き

人の中に、呪われた不死の証が現れはじめていた

今の世界の全ての始まり、”最初の火”が消えれば、人の世界は暗い世界へ変わってしまう。

だが、不死の勇者が現れ、大王グウインの後継として最初の火を継げば

再び世界は火の時代、光の時代へと戻るだろう。

しかし、仮に勇者が現れたとしても 最初の火が熾った地へと赴き大王グウインの後継として火を継ぐのは、簡単な事ではない。

今は捨てられたかつての神々の住む都、”アノール・ロンド”にて、王の器を手にした後

器を強大なソウルで満たし、最初の火の炉への扉を開け

最早燃え殻となったかつての王グウインを打ち倒さなければならぬ。

その全ての試練を乗り越えた、強いソウルを持つ者こそが王グウインの後継として火を継ぐのに相応しいのだ。

そして、器を満たすのに必要な強大なソウルを持つ者の内の一人が、彼、墓王ニトである。

火の時代のはじまりより王のソウルにより得た力全てを

死に捧げてきた彼の力は最早尽きかけているが

それでも王の力は強く、人間一人に対する試練としては十分な力だろう。

地下墓地を抜け、暗い、死の領域巨人墓場を制覇し

遂には彼を打ち倒した者こそが、最初の火の炉へと至るに相応しい者だ。

彼はずっと、待っている、不死の勇者の到着を

東方墓王伝 プロローグ（後書き）

ダークソウルに登場するボス 墓王ニト様を幻想入りさせたくてこうなりました。

小説を書くのはこれが初めてですが、下手糞なりに努力し、続けていこうと思うので、生暖かい目で見守ってくださいたら幸いです。皆様からの感想、意見はいつでも募集しております。よろしく願います。

東方墓王伝 第一話

光の届かない、巨人墓地の最深部

そこには人が入るには大きすぎる巨大な棺桶が有る。

最初の火が熾つてから数千年 自らの力を求めた眷属からの献上物を得ながら

墓王ニトはずっとその中で不死の勇者の存在を待っていた。

ドオン、と不意に静かな巨人墓場には似合わない、戦闘音が聞こえた。

金属鎧の擦れる音、眷属の放つ火の魔法の音、赤子骸骨が水中から生まれる音、肉の切れる音

しばらくして、鎧の擦れる音以外は聞こえなくなった。

彼の棺桶がある場所への道が、開かれる。

やっと、来てくれたのか

試練として立ち塞がる者に、言葉は必要ではない。

彼の、墓王としての、持てる力の全てを以って、勇者としての格を試さなければならない。

彼はゆっくりと棺桶からその姿を現し、剣を持った骸骨を召喚する。力の大半を失う前ならば、大勢の骸骨を召喚できたのだが、今では五体程しか召喚出来ない。

人並みの大きさの骸骨を三体、人よりも二回りほど大きい巨人骸骨を二体

召喚した骸骨達が勇者に反応し、果敢に向かっていく
それを二トは地面から自らの持つ剣を突き上げる”墓王の大剣舞”
で援護する。

女が叫ぶような声が聞こえた後、二トは自身の持つ、死者の骨で出来た剣を地面に刺した

すると大きな剣が地面から生え、骸骨達共々勇者を足元から突き上げた。

召喚された骸骨達はバラバラになったが、墓王の力で直ぐに元通りに復活する。

その攻撃により致命傷を負った勇者に止めを刺そうと復活した骸骨達は襲いかかったが

間一髪の所で勇者は回避し、エスト瓶で傷を癒した。

勇者が息を付くのも束の間、骸骨達が勇者への攻撃を仕掛ける。

勇者はそれを迎え撃ち、大剣で大きく薙ぎ払い、その一撃で骸骨達は倒される。

しかし、墓王の力により復活するはずの骸骨達だったが

勇者の振るった大剣は神により祝福されているらしく、復活は阻止された。

骸骨達を無力化した勇者は盾を構え、次の目標を巨人骸骨達に定め二トの横を走り抜け、巨人骸骨の所へと向かう。

二トは勇者に墓王の剣での一撃を与えようと剣を振るうが

力を失った二トの剣の振りは遅く、素早い勇者を捉えることが出来ずいくら剣を振っても無駄だと判断した二トは、祈るような動作で死の瘴気を方位に放ち

巨人骸骨共々勇者にダメージを与える。

全盛期ならば古竜すらをも死に至らしめる事が出来た二トの瘴気だが衰えた今では威力が大きく落ちてしまっていた。

それでも尚与えるダメージは相当なもので

勇者からある程度の攻撃を受けていた巨人骸骨は倒れ

勇者を後退しエスト瓶で回復せざるを得ない状況に追い込む。

二トはそれを墓王の大剣舞で追撃するが回避され

巨人骸骨達は骸骨達と同じように墓王の力により復活し、勇者への攻撃を続ける。

巨人骸骨達と違い、二トの動きは遅い。

勇者と戦う巨人骸骨達を援護しように行こうにも、少々距離が遠すぎる。

加えて彼の持つ唯一の遠距離攻撃である墓王の大剣舞も、少し間を置かなければ使用できない

つまり、近づいて剣で斬るしか無いのだが

そうこうしている内に巨人骸骨一体が倒されてしまった。

残る一体も大剣を何度も受けているのでもう耐え切れないだろう。

巨人骸骨を”復活させる為”に墓王の大剣舞を放つが

勇者の大剣の方が早く、残る一体の巨人骸骨も倒されてしまう。

恐らく神聖の武器で倒されたので、復活もしないだろう。

二トにより召喚された骸骨達を見事倒した勇者は

二トの懐へと飛び込み我武者羅に剣を振るう。

二トも剣を振るうが、体に密着されている為に当たらず、二トの体は大剣により削られていく。

死の瘴気を放とうか、とも考えるが瘴気を集めている間に倒されてしまう危険がある。

その為、二トは何も持たない左腕で勇者を掴む、

予想外の攻撃に勇者は避けることができずに二トの手に掴まれ思い切り握られてしまう。

金属鎧のへこむ音と、骨の折れる音がし、たまらずうめき声を上げた。

そのまま擦り潰して殺してやろうかと思っただ、窮鼠猫を噛むとはこの事だろうか

勇者は二トの指を開き、手の内から転げ落ちる。

二トの体力は勇者の攻撃により限界近く、勇者と違い回復もできない。

後退し、傷を完全に癒した勇者が向かってくる

瀕死状態からの素早い復帰は不死人ならではのだろう、普通の人間ならばそうはいかない

二トは最後の力を振り絞り死の瘴気を放とうとするが、

発動よりも早く近づいた勇者は持てる力の全てを乗せた、大剣の一撃を二トに放つ。

今までに受けてきた大剣とは比べ物にならない威力の攻撃をまともに受け 二トは、倒れた。

後は、頼んだ

最早声も出せないが、彼の最後の思いを勇者に伝える。

人骨を集めたようなその体は眩い光を放ち、二トが最初の火より見出した王のソウルを残して、虚空へと消えた。

勇者は二トの棺桶の前に現われた篝火を使い、火継ぎの祭壇へと向かった。

東方墓王伝 第一話（後書き）

戦闘描写難しい…

次でやっと東方キャラが出ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5748z/>

東方墓王伝

2011年12月19日17時56分発行